

MfG_J_former_Nagaoka_Castle_and_Town

長岡城と城下のストーリー

城と縄張り図

商家

西蒲原郡旧藩領地分布図

中越全域の舟道

西川、及び北国街道横道・新潟蒲原往来

三国街道(中通り)

長岡藩の内川河渡

江戸期から続く江戸文化

江戸期の遺構

史跡

道路

幕末の藩主

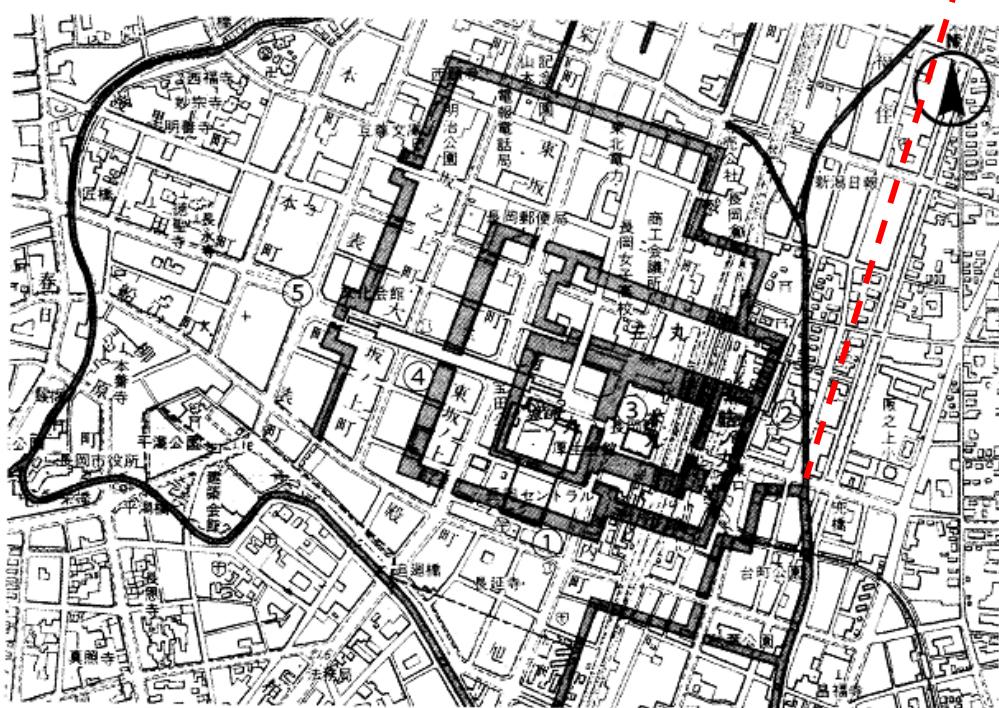
以下は、「長岡城の町割りと寺院」を参照下さい。

長岡藩創生期の寺院配置政策

長岡市中心部の寺院図 (市史双書 『長岡のお寺とお堂』)

城と縄張り図

長岡城跡の位置及び縄張図



(新潟県教育委員会 1980『昭和 54 年度新潟県遺跡地図』から転載・加筆)

2018年秋の、さいわいプラザで開催の
「長岡城址出土品展」パンフレットより

追記した「赤の点線」が、福島江用水が大正期に改修された後の、現在の水路である。

改修前の水路の経路から、福島江が長岡城の水源であったことが、見て取れるように、大切なものであった。

江戸初期の福島江開削で、長岡藩は、士族にも使役を負担させた武士は用水建設の使役に反対したという研究発表も耳にするが、本当に、そうであろうか。 難工事であったようだが、まさに、城の水源確保のためであり、反対意見が主流であったとは思えない。

牧野氏・堀氏に帶同してきた商家 (長岡市立中央図書館 奉仕係 若月様の調査)

『長岡市史 通史編上巻』P.410～

1616年に長岡藩主になった堀直奇、同4年に入封した牧野忠成が城下町の育成のため、周辺の町場や広く各地から商人を集めた。

町肝煎(のちの検断)となった草間茂右衛門は藏王町から、裏三ノ町の上州屋伝兵衛は牧野氏について上州の横堀(群馬)から、表五ノ町の平野屋善蔵は備前の岡山からやってきたという。

『長岡の歴史 第三巻』第一章 職人の変遷

P.116～ 平野屋(酒造)について

岡山にあったよう。いったん摂津国に居を構え、しばらくして越後古志郡千手町村にやってきた。1618年牧野侯の移封にあたり、本陣にあてられたが、1650年に千手町村から表五ノ町に移り住んだ。こちらの記載はありましたが、岡山からいつ来たのかは載っていませんでした。

P.123～ 上州屋(醤油)について(長岡市史よりも多少詳しく記載あり)

P.360～ 小村屋(薬種屋)について

御維新前迄は、薬種と云っても長岡中に漸く三、四軒の他なく、現今の神田三之町の小松屋の本店、もと三ノ町の小松屋、他一、二軒位のものであった。

小村屋の祖は尾張の豪族といわれ、足利時代の末期、戦に敗れて、この地に隠れ住み、出身地名をとて尾張屋と屋号して、売薬業を営んだ。元和4年、牧野忠成は長峰からこの地に移封されたが、寛永7年に長岡に来たったとき、この尾張屋で憩んだともいわれ、このころからいまの表町三丁目に居を構えていた。

上記の記載あり。

『ふるさと長岡のあゆみ』P.105

本格的な醤油製造のはじめは、裏二之町の上州屋大里伝兵衛とい。

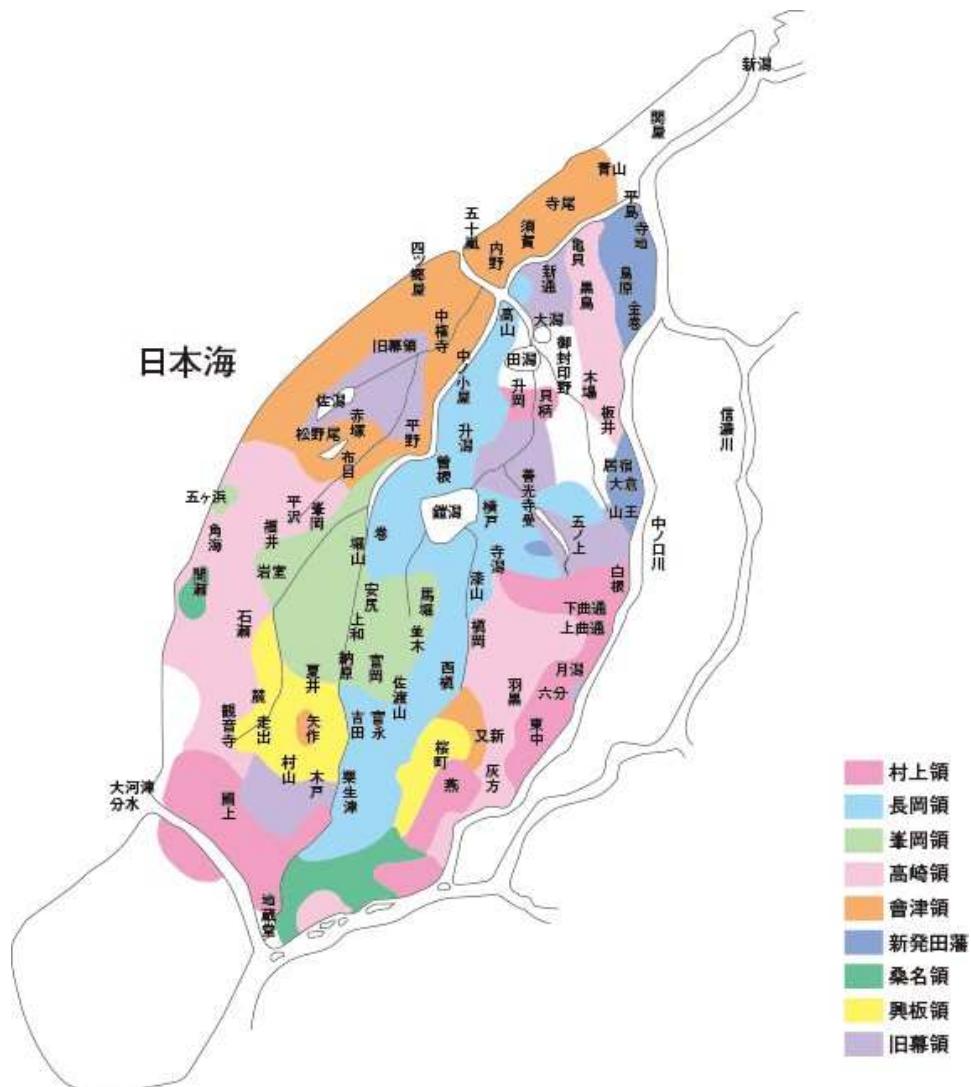
大胡から長岡移封の折に随行して長岡に住んだ。

上記の記載あり。詳しくいつ、というのは載っていません。

『長岡商工人 百年の軌跡』P.56 平石良次を中心とした醤油醸造業

いつ、どこからという記載はなし。

幕末の西蒲原郡旧藩領地分布図



<http://www.niigata-satokata.com/learn/kaihatsu/>

越後平野の開発が急速に推し進められるようになったのは戦国時代末期から江戸時代前期にかけてです。

越後平野は新発田藩、長岡藩、村上藩、その他幕府直轄領を含めた多くの藩が領地としており、利害が交錯していたため、開発が思うように進まない状況でした。

しかし、6万石の領地のほとんどが水害常襲地帯にあった新発田藩が、その石高を増やすべく、越後平野の開発に着手したのです。

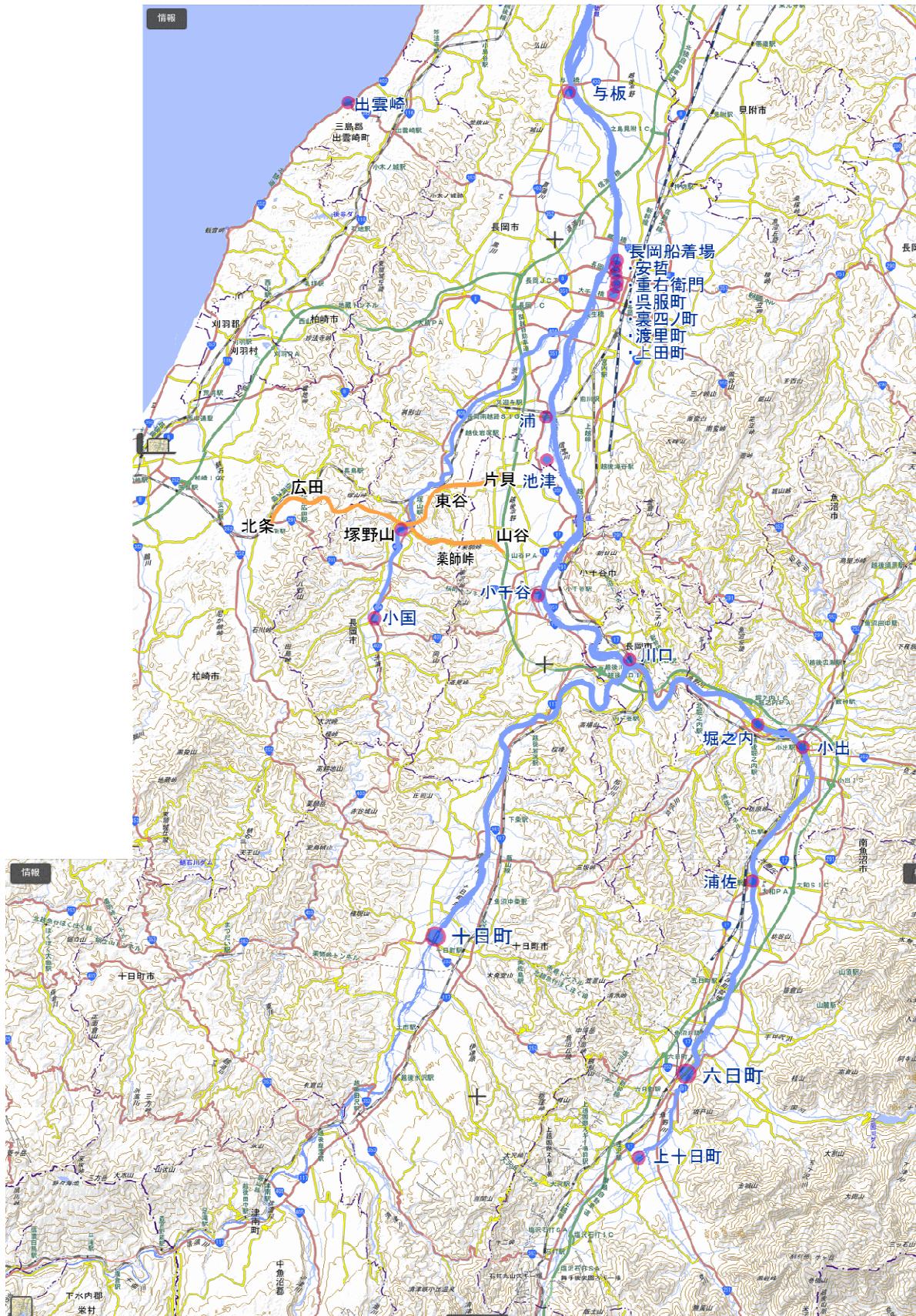
このような洪水の氾濫原(はんらんげん)注1)を開発するためにはまず必要だったことは、氾濫原の水抜きのための瀬替え(せがえ)に始まり、潟の干拓を目的とした分水路を整備することでした。これにより、

水田の面積が増加し更には米の石高を増やすことができたのです。

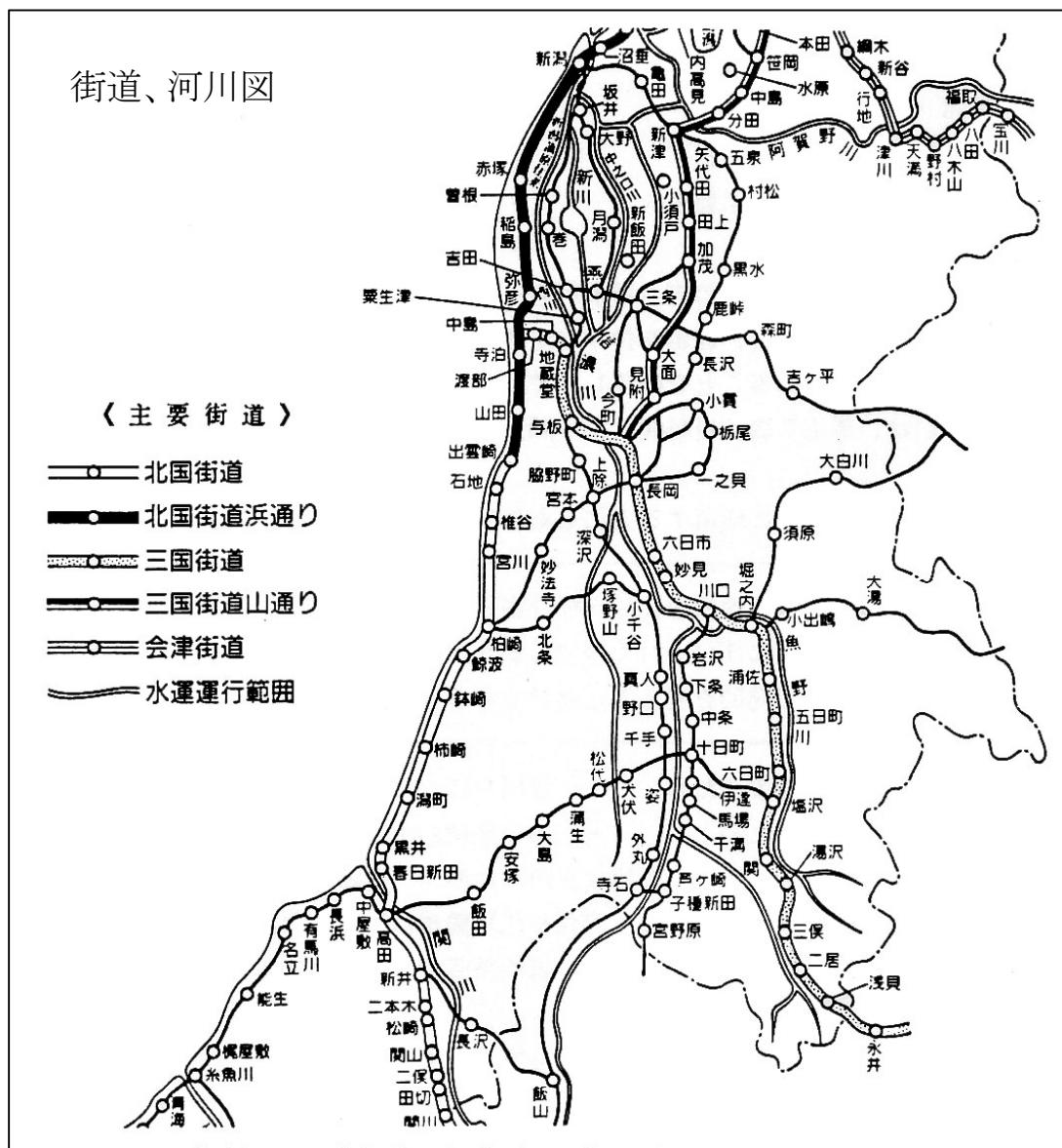
西蒲原郡旧藩領地分布図(幕末)「西蒲原土地改良史 上巻」より作成

図の示すとおり、藩の領域は複雑でした。また、鎧潟から田潟、大潟へ流れこむ早通川の右岸一帯は、洪水時における遊水池でした。ここは幕府によって開発が禁止されていた区域であり、「御封印野」と呼ばれました。

中越全域の舟道



西川、及び北国街道横道・新潟蒲原往来



西川について

現在の一級河川西川は燕市大河津で信濃川から分派し、新潟市西区平島で信濃川に合流している。過去に西信濃川と呼ばれていた記録もあり、直江兼続の直江工事以降、信濃川が幾度となく流路を変えたなかで、一番西側を流れているときの跡であるとも言われている。

以前、西川は新潟港と西蒲原地域を結ぶ動脈だった。江戸時代には蒲原船道と呼ばれる川船株仲間が36隻の大型川船をを使用して西川舟運に従事していたらしい。年貢米や商人の荷運搬のほか渡し船もあり、明治時代には新潟から吉田(現燕市)まで蒸気船が運航していたときもあった。

現在は、舟運はなく、主として上水道、かんがい用水の供給など利水面で地域にとって貴重な河川となっている。

北国街道横道・新潟蒲原往来

北陸道は、古代より都から北陸地方を通り、越後から佐渡に通じる道。江戸時代には北陸街道と呼ばれるが、この時は加賀の金沢から越後の高田まで。

高田から出雲崎・弥彦を通り新潟湊までは北国街道と呼ばれていた。

地蔵堂から西川沿いで新潟湊までの道は北国街道横道・新潟蒲原往来と呼ばれた。

現在の国道116号線はこの道にほぼ平行した道路。そして柏崎からは国道8号線になる。

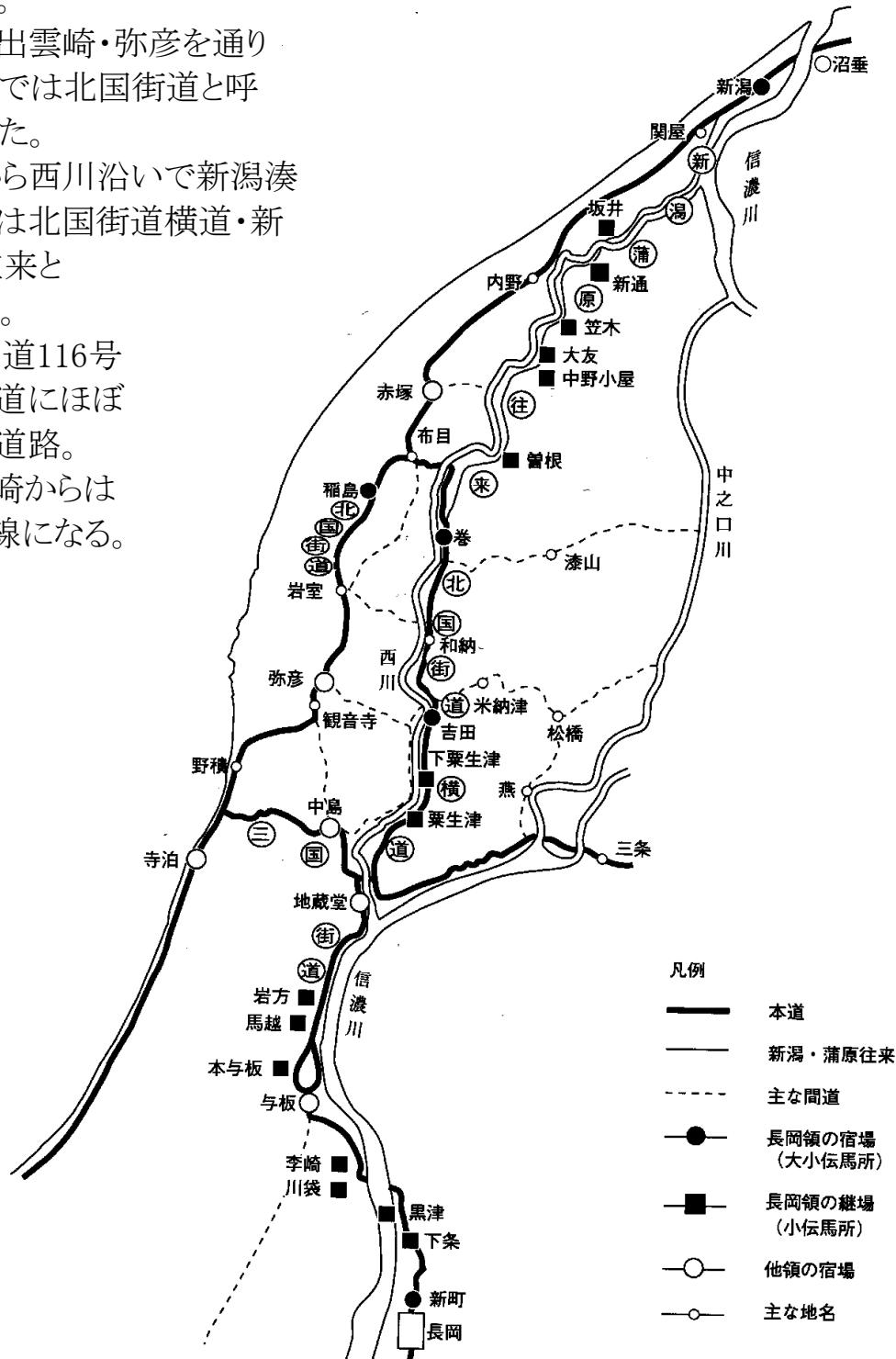


図11 文政元年 蒲原近在の街道と往還 「越後輿地全図」より作成

新潟県歴史の道調査報告書 第八集
 三国街道(中通り) 新潟県教育委員会
 (二)街道の確定

p13

千手町村と長岡城下柳原町とを分ける赤川（内川）にかかる境橋（現在の栄橋）を越えて長岡町に入る。元和四（1618）年の長岡城の図には、橋は長さ八間、横二間の板橋で、橋を渡った町の入口に高さ三間の枡型状の土居が見え、道が土居の間を鍵型に曲がって通じている。長岡の市街が整うまで近辺の総鎮守だったと伝える神明社が街道の左側にあり、幅四間半の道の両側には呉服問屋や海産物問屋などの商家が多かったという。

道は「く」の字状に曲がって裏一の町（現本町）西側にある喰い違いの四つ角に突き当たる。左の道は年貢米を収納する上蔵屋敷（現船江町）のあった内川べりに通じている。三国街道は、この鍵型の四つ角を直行して幅六間半の裏町通り（現本町通り）を進むか、あるいは右折して、平潟神社参道前の道

（旧同心町通り。近世は参道は北側だけに開いていた）を通って表一之町南端の喰い違いまで出て、そこで左に曲がり、表町（旧本町）通り（現国道三五一号線）を北上する。

平潟神社は長岡築城前はJR長岡駅付近にあったが、敷地が城の建設地にかかかったため現在地に移転した。昭和二十（一九四五）年八月の米軍機による長岡空襲で旧市街の八割が消失した際、神社境内に避難した多くの長岡市民がここで焼死している。

表町通りは長岡城外堀の西側に位置し、外堀と平行して幅七間の道路が表一之町から五之町まで南北に通じ、呉服町一丁目の角に達している。表一之町には職人が多く居住していたが、二之町から四之町までは有力商人たちの商店や土蔵が軒をつらねていた。表町通りの東方にあった長岡城跡は、現在、市内随一の繁華街となり往時の面影は全くなないが、長岡城本丸跡の位置に建設されたJR長岡駅から、信濃川の大手大橋に向かう道路と表町通りの交差点に、城下町であった名残の枡形があり、城郭内にあたる表町通りの東方に、米百俵の故事で知られる国漢学校跡、山本記念公園がある。表町通り西側には、裏町通りに沿って裏一之町～四之町までの四町が、さらにその西方の内川の近くに上田町や渡里町があり、多くの寺院が集めら

れた通称「寺町」がある。渡里町に長岡城下で最も重要な河渡があり、川船の発着や物資の積み替えで賑わう繁華街であった。長岡町で泊まる旅行者は、必ず渡里町の旅籠に宿泊することが義務付けられていた。

p14

表町通りにもどり、呉服町の交差点まで進む。江戸時代のこの地点は鍵形の三叉路になっていて、内川沿いの道を北に行けば、藩の蟻座役所脇にあったという轍座稻荷がある。街道は、交差点を右に曲がり、呉服町の通りを東に進んで、関東町の国道三五二号線の交差点を左に折れる。国道となつた三国街道(神田通り)は、神田一丁目から三丁目(旧桶屋町・神田一之町・二之町・三之町・鍛冶町)の各町を真っすぐに北へと延びる。往時の道幅は五間半と記録にあるから、大幅に拡幅されている。途中、神田町一丁目の西に堀直竜が三年間、仮城として居住したと伝える曹洞宗安善寺があり、一丁目と二丁目の間の道を西に入ると、現在、お蔵稻荷社が建っている付近一帯に、長岡藩北組が納めた年貢米を保管する北蔵屋敷が建てられていた。

長岡城下は鍛冶町(現神田三丁町の北端)まで終わり、国道三五一号線と八号線の交差点から北は、新町(旧新町村)となる。新町村は、正保国絵図では馬継ぎ宿になつてないが、天和年間(一六八一~八四)から伝馬宿継ぎだけを行うようになった。藩の政策で旅籠宮業は許可されなかつたので、旅行者は長岡城下の渡里町まで行って宿泊しなければならなかつた。

国道にかかる歩道橋を過ぎると街道は右折し、県道長岡・見附・三条線をJR信越線の高架橋の手前まで進む。右側の地蔵堂前に金比羅塔の道標がある。正保国絵図には、街道はそのまま東進し、新保村から浦瀬を経て東山丘陵に沿つて見附へ通じる道筋が描かれているが、その後、この金比羅塔の道標に「左ハみつけ、三条道」と記されているように、高架橋の手前で左に折れて北上する道筋が北越後に向かう主要通路となつたらしく、文政年間(一八一八~二九)の越後国絵図にもこのルートが太く記されている。

後者の道筋をとり、道標から左方の道に入り、JR北長岡駅前の道を栖吉川と福島江用水の分岐点まで進む。栖吉川にかかる改修橋を渡ると、

街道はほぼ福島江用水の江筋に沿って下々条集落まで延び、福島江用水と県道押切停車場線が交差する地点に達する。三国街道の本道はここから県道を西に横断し、下々条(旧下条村) の集落から黒津町と天神町地域を北に進み、川辺町の信濃川岸から対岸の川袋町に渡り、与板一地蔵堂一中島一渡部と継いで寺泊宿に至るが、下々条から渡船場までの道筋や渡河点については位置を確定に至らなかった。県北の新発田藩、村上藩、村松藩では、下々条の福島江用水と県道の交差地点から、鴻巣橋のやや上流で福島江を渡って、県道七軒町・見附線を東方に進み、七軒町の猿橋川河畔の口留番所を経由して、福井村一鹿熊村(見附市)一見附町一加茂を経て、それぞれの城下に達する道を整備し、この道を三国街道と呼んで利用した。また、新発田藩はこの道の他、別道として下々条から北に向かって、現在の高見町一今町(見附市)一

p15

堀直奇

いとこにあたる堀秀政は「名人久太郎」と呼ばれた文武両道の武将。その息子秀治に仕えた堀直奇が、やがて長岡に移封される。

長岡の内川河渡

水運も、長岡の内川から、新潟、会津、直江津・高田、小出、六日町、十日町、そして信濃に通じていた。

〈主要街道〉

- 北国街道
- 北国街道浜通り
- 三国街道
- 三国街道山通り
- 会津街道
- 水運運行範囲

〈主要な河道〉

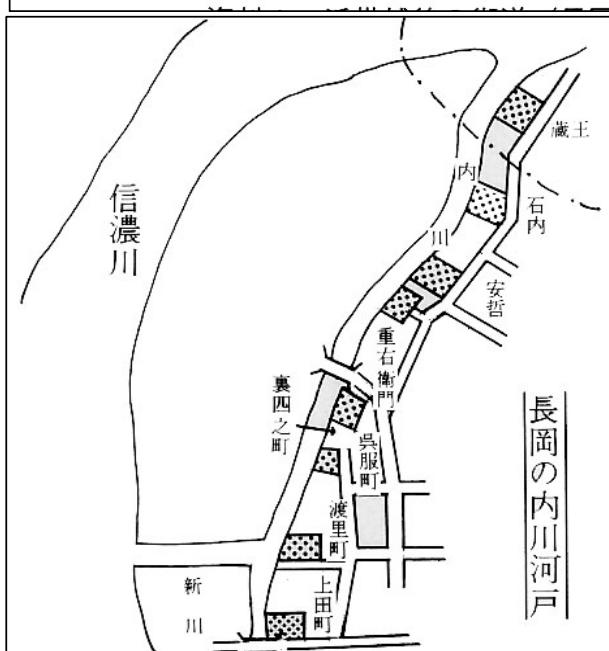
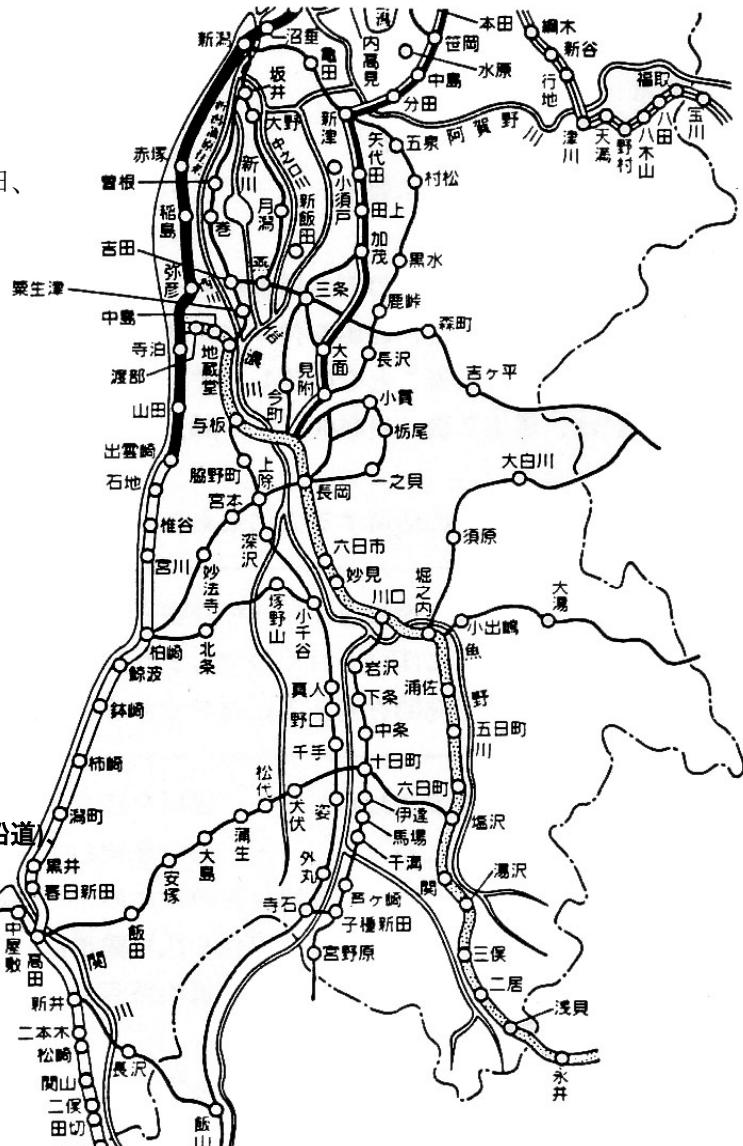
阿賀野川（会津）

信濃川（長岡船道、小千谷船道、妻有船道）

魚野川（六日町船道）

関川

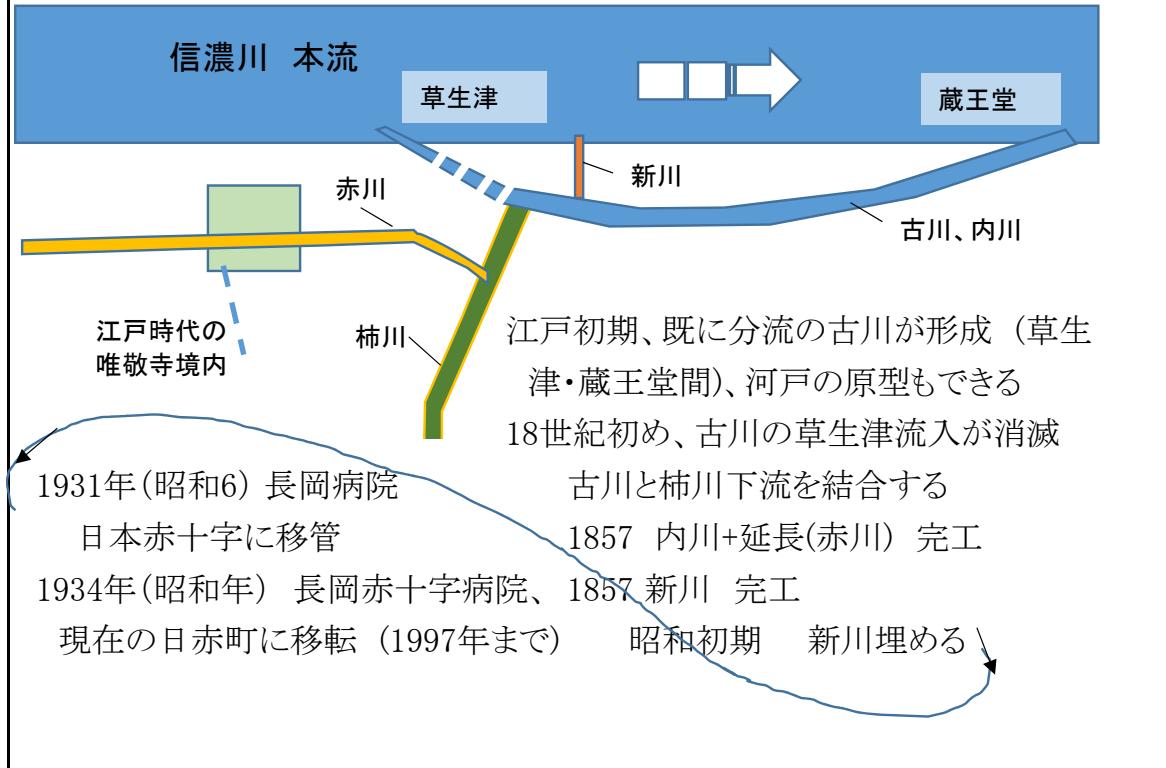
船道(ふなどう)とは
河岸を拠点とする
船持ち仲間



内川

<http://koshikuwa.info/?p=3942>

古川、内川、新川、赤川の変遷の簡略図



昔の長岡十二ヶ月の中 二月 吳服町蠶座稻荷初

